

良心／人間存在の内なる法廷

ワシントンDCでは毎日のように殺人事件が起きている。テレビやラジオ等の放送局がそのニュースの時間に競って報道する“ブレイキング・ニュース”のほとんどが殺人事件やその他の犯罪であることを思うとき、私たちの心は痛む。私たちはあらゆる種類の犯罪に囲まれ脅かされて生きている。私たちの社会はいったいどこに進んで行くのだろうかと不安にかられる。

この不安や痛みは人間存在の内なる「良心」の叫びである。そして、その良心の叫びが、もし人間から無くなるとすれば、人間社会の道徳的秩序はたちまちにして崩壊してしまうであろうと思う。「良心」は神の驚くべき賜物である。これなしには、人間の道徳的秩序は保たれない。

或る辞典は良心を次のように定義する。「良心とは、人間が道徳的善悪を識別し、それが善と認めたものを行なうように、また、悪と認めたものを行なわないようにさせ、また（自分のした）行為を判断し、その判断を魂の中で執行するような人間の機能である」と。

私たちが、自分がいいことだと判断することを行なったとき、心に平安と喜びと満足感を覚え、逆に、しなければならないことをしなかったり、或いは、してはいけないことをしてしまったとき、内的に不安や苦悩、恥辱や後悔にさいなまれるのは、みな良心の働きである。

哲学者カントは、良心を「人間存在の内なる法廷」と呼んだが、確かにその通りで、私たちは、自分の中に、まるで二人の人が住んでいるかのように一方が非難し、他方が弁明するという良心の戦いというものを経験するのである。まさにパウロが言う通りである（2：14～15、7：15～24も参照）。

人間はみなそのような良心をもって生まれてくる。良心とは、人間がサルやイヌとはまったくことなる道徳的人格的存在として造られているということを示す有力な証拠である（創世記1：26～27）。

パウロは15節で言う。文字としての律法を持っていなくても、人間は神のかたちにかたどって造られているがゆえに良心をもっている。それは人間の道徳性の中心である。その良心に、生まれつき善悪の知識（神の律法）が刻み込まれている。だから、人間は律法にかなうこと（善）をしたとき喜び、それに反したこと（悪／罪）をしたとき、罪の呵責に悩むのである、と。

そのような意味で良心のない人はいない。良心を失った人間というのは、良心のない人のことではなく、良心が罪によって暗くされ、その判断が狂ってしまった者のことである（1：21）。

アダムの墮落以来、人間の良心は、神に背き、善を善とせず、悪を善として、正しい判断を下すことができなくなってしまっている。善を欲しながらそれを為すことができず、悪をしてはいけないと思いながらそれを抑えることが出来ないという、存在の根底において道徳的に無力な者になってしまった。これが人間の罪の現実であると聖書は告げる。

しかし、神の福音のみ言葉に触れ、キリストの血潮によってきよめられ、聖霊のお働きによって新たにされると、私たちの内の再生された（ボーナゲインborn.again）良心は、善悪の感覚を鋭くされ、私たちを罪から守り、神のみ心になつた生活へと導く霊的原動力となるのである。良心が『良心』となるのは、キリストにおける神の恩寵によるのである。